



ん。

上恵須取を出発してからすぐ暗くなり、次の部落布礼という所の造成飯場に一泊することになりました。

飯場長もおりまして米の御飯を炊いてくれました。

私たちは食糧として炒り米や、お米も持つておりましたが、この先何日も野宿することを考え持っている食糧を大切に、御馳走になりました。

その夜は明日への行動について集まった人たちで相談が始まり、みんなの意見では布礼部落の奥から山越えして、駅のある東海岸の内路に出ることが決まり、男たちは先頭となり草を刈りながら近道をする事になったが、私たちは小さな子供がおり、道のない山中を越えることはできないと判断して、翌日上恵須取に逆戻りして道路のある内恵道路を歩いて百キロもある内路駅に出ることにしました。

上恵須取に戻ると爆撃のため中心街は全部焼失し家屋の残骸ばかりでした。調査部長派出所も全焼し、炊事場の水揚げポンプだけがポツンと焼け跡に残っているのを見て、ソ連に対する憎しみは一層ますますばかりで

した。

休む間もなく三歳と五歳の子供の手を引き、十人の家族の一行が内恵自動車道路を歩いて上恵須取町の次の部落、緑樹という部落付近でトラックに拾われました。

運転手さんに感謝の気持ちを込めて少々のお金を差し上げましたが、受け取ってくださいませんでした。家族一同どんなに救われたことかと今でも感謝しております。

この道を内路の駅までいけば避難列車が出るということで、百キロの道を長い長い行列をつくり、眠り続けながら必死に夜通し歩いているこの人たちをトラックは、通り越した。白雲峡は避難の人で長蛇の列、道端には老人が避難行から脱落し捨てられた布団に腰をおろしていたり、持ち切れなくなって一つ捨て、二つ捨てた荷物が道端に山となって連なっている。また機銃掃射で死んでいる人、病人や老人が倒れていたり、自動車が発射で動かないもの全く無様な光景であった。トラックが内路駅に到着したのは八月十八日の夜八

時過ぎ、その晩は駅長さんの許可を受けて待合室の長椅子に寝かしてもらい、電気もついているしちよつと安心した。食事はパンやトーキビを買って満腹となり、子供たちもみんな安心と疲れとでぐっすり。

翌十九日朝八時ごろであつたと思う。駅待合室で知り合いの佐々木という憲兵さんに偶然に出会ひまして、いろいろと避難してここまで来たことを話しました。憲兵さんは、避難民の誘導の任についているとのことでした。

駅長さんや佐々木憲兵さんの話では、二十日ごろ避難列車が数番から大泊に向かつて出るということでした。多くの避難民で一度に大泊りに行つても収容する所はないから、途中の主要駅で列車を切り離して分割収容させる予定とのことでした。

避難民を乗せた列車は無蓋車でしたが、駅長さんや佐々木憲兵さんの計らいで機関車の次の貨物車に乗せてもらいました。内路駅を発車したのは夜中でしたが、やはり途中の駅で後の貨車は何両か切り離されているようでした。

私たちの乗った列車が大泊駅に着いたのは、二十日の朝八時ごろでしたが、貨車から降りて大泊港に行つたときの気持ち、海が見えてきたときの子供たちの喜び、いよいよ内地に帰るんだという希望と喜びでいっぱいでした。

波止場でしばらく待機して、いよいよ乗船の連絡があつたのが二十日の午後二時ごろでした。船の名前は「泰東丸」でした。喜んで乗船甲板の前の方の一角で親子十人が車座になつて、互いに離れないよう細紐で身体を繋ぎ、出港の汽笛を待つておりましたところ給つたことが起こりました。

三歳の女の児がパンを食べたいといつて泣き出し、仕方がないので十五歳の男の子を下船させ買いに走らせました。

その泣き方が異様で、大声で暴れるような泣き方でした。パンを買いに下船した息子はなかなか戻ってきません。果たしてパン屋が見付かったのか、この配給時代の戦時下でパンを売っている店があるのか心配でした。そのうちに船が出港するとの合図です。パンを

買いに下船した子供を残して出港されたらと心は焦りに焦り、やむを得ず家族全員が下船してしまいました。

そのときの親の気持ち、一度乗船してつかんだ喜びを放棄して下船したその心境たるや、なんたる不運な親子だろう。何度も後ろを振り返りながら下船し、出港して行く泰東丸をうらめしく思うのでした。

下船してからパン買いに走った子供が戻るまでの待つ時間の長いこと、このあと二度と引揚船が入港するのかがどうか全く予定もわからず、実に心身共に疲れ切った思いであった。

トラツクの運転手さんや、内路の駅長さんや、佐々木憲兵さんの計らいで順調に上船できて喜んだのも束の間の幸せであった。あのときの哀れな心境、いっそのこと親子十人で海に投身を考えたりました。そのうちにパンを買いに行つた子供が戻つて来たので、あんなに泣いた子もパンを見て嬉し顔に変わったのです。

その後も波止場で待機していましたが、夜中に船が乗るという知らせがあり二十一日の朝方、海防艦に乗

船できました。八月二十二日十二時ごろ稚内港に上陸し、一安心して心にも行動にも余裕ができたのでした。

稚内駅で避難して来た知人とばったり会い、私たちにどうして稚内にいるのか尋ねるのでした。その方は私が泰東丸に乗ったことを知っていたのです。下船した事情を説明してやっと分かったのですが、泰東丸、小笠原丸、第二新興丸の三隻が留萌沖で魚雷で沈没したことを知らされたときの、私の驚きと複雑な心境は今でも忘れません。

あのとき、泰東丸に乗っていたら親子十人は船と運命を共にしていたと思うのです。

あのときの三歳の子の泣き方は普通ではなかったのです。神仏の守りがそのようにさせたとか考えられません。また、パンを買いに下船した十五歳の子供もパン屋を探すのに時間がかかり、パンがないならしないで、すぐ戻ることもせず、何軒も回ってパンを探していたり、そのため出港に遅れたことなど、いろいろ考え合わせ、不思議に思うのです。

神仏が三歳の子を通じ下船させたとしか考えられま

せん。私の考えは間違っているのでしょうか！ 稚内駅は引揚者で混雑を極めていたが、その中をどうにか普通列車に乗り込むことができ、函館の知人宅で五日間お世話になった。本籍地青森には八月三十日到着、親せき縁者から親切に迎えられました。

その後、三歳の女兒は疲労と栄養を損ったのか、九月七日死亡しました。親子十人の命の恩人というか、身代わりとなったのです。

一方樺太で別れた主人は密航して無事に帰って来ました。もう九十二歳になりましたが、当時の状況を次のように話しておりました。

昭和二十年八月十七日、妻に子供たちを頼むと一言、これが別れの言葉であったと思う。

豊原、真岡方面の警察署から多数の警察官がソ連兵に逮捕、連行され、沿海州に抑留されたという情報が、次から次と入って来るのでボヤボヤしていられぬ。

自分の身も危険なので、いろいろ同僚と協議了解を得て、一応避難民の誘導も終わったので密航を決意、野田町は密航船の出入りがあると聞き、その野田町に

潜り込んだ。移動するにはソ連発行のパスポートが必要だが、その入手はできない。それで大変苦労した。宿屋に泊まるにしても、バスに乗るにしても、ソ連兵が同乗することがある。汽車の切符を買うのには絶対にパスポートが必要だ。それをくぐり抜けるのに大変だった。

密航の仕事をしているのは漁場の親方で、密航料は当時のお金で七十五円の前払い。機会をうかがっている間は漁夫の仕事一カ月。一度密航を企てたが、日本人からソ連に密告され中止。二回目は十一月十五日、深夜に紛れて野田の久良志港から出航、船は五屯ぐらの発動機船、春鯨漁のときを使用して陸揚げしておいたものを出港間際に急ぎよ船を降ろし、試運転もせず出港したところがエンジンがかからない。おまけに船が乾燥していて船底から海水が入ってくる始末。

陸地から二十キロぐらいいまで槽で漕いで沖に出た。五、六時間して機関士の努力によりエンジンが始動、稚内港を目標に南下、当時はいろいろなデマが乱れとび本斗町と海馬島の間を、ソ連の飛行機や軍艦が密航

船を取り締まって多数が捕虜になっているということであった。

密航料を払って出て出港の間際に乗船できず、密航料を損した者もいる。発動機船は途中、度々の故障でエンジンは止まる。その内に天候が変わり、風波が強まり、次第に大時化しげとなる。船は機関と帆で走っていたが強風のため帆柱は折れる。

波は小山のよう、そのような状態でもう五、六時間で稚内港に着くという。明かりがチラホラ見えてきたとき、またまた機関が故障、船は木の葉のように揺れる。風は稚内から樺太の方に吹く出し風で、船は、樺太の方にどんどん流される。ここまで来て死ぬのかと神仏に救いを求めた。やっとエンジンがかかり、風は稚内港に近づくに従って弱くなり波は静かになつてきた。

そのころになつてエンジンの調子は一段と良くなり、トントンという発動機船の軽快なあの音、「助かった」という思いと嬉しさが今でも心に残っている。

稚内港に入港したのは十一月十七日午後十一時ごろ、

港には町の警防団の人たちが、多数提灯を持って出迎えてくれた。「まあまあ、このしげによく無事で着いた」との慰労の言葉にただただ感謝感激であつた。

その夜は稚内の旅館に泊まり、船には酒が積んであつたので、親方船長、機関士たちが一斗樽の蓋を割つて祝杯を上げてくれた。それまでは私は逮捕を逃れて偽名でいたが、ここで本名と職業を明かした。そのときの密航者は全部で二十人だつた。

青森の実家には十一月二十五日に帰宅、家族は全員先に引き揚げており、三歳の子供だけが九月に死亡したという、本家の兄夫婦には大変お世話になり今でもその恩は忘れることはない。といつも口ぐせのように言っております。

あの引き揚げた八月二十五日は、私と子供と十人全員が主人の生家に帰つたと言つても、主人が一緒に引き揚げたわけでもなく、あの食料難の時代に、食い盛りの子供九人も連れて帰つて来たのです。迷惑をかけたことが重く心にのしかかり、ましてや主人の実父母はすでに他界しており、兄夫婦のお世話を受けたので

す。

一日や二日ではありません。主人がいつ帰るか当てもないままに……身も心も共に毎日が、遠慮と気遣いでいつばいでした。

それでも私たちの気持ちを察してか、ザックバランに津軽ペンまるだしの言葉で私たちの気持ちを和らげようとして気遣かったださるのがわかりました。

その上大変なことが起こりました。

泰東丸で異常なほどに泣き叫んだ三歳の睦子の体に異状が起こりました。避難途中満足な食事もとらず、米や大豆の焼いたもので子供の栄養は十分ではなく体調は悪いのは分かっていました。兄夫婦も心配して医者呼びいろいろと手当てをしたのですが、ついに九月七日死亡してしまいました。

引揚げ以来九人の子供たちがお世話になつてゐるあげくの果てに葬儀のことまでご迷惑をかける結果となつてしまいました。

いる所もないぐらいの気持ちでしたが、と言つて行くあてもなく、ただただ主人が無事で一日も早く帰つ

て来る日待つしかありませんでした。本家の御主人は須郷長四郎さんと、長年村役場の収入役、助役を勤め、村でも上流の農家で村の人望も厚かつたようでした。

本家の長四郎兄と弟の私の主人とは、兄弟の中でも特別に仲良しのようでした。

あのころ夕食のとき、私の子供たちに樺太の父ちゃんが帰つて来たなら、この酒を飲ますんだとか、汽車の汽笛がポーッとになると、そら樺太の父ちゃんが帰つて来たとか、子供たちを励ましてくれたり、義兄は私の主人の帰りを相当待っているなあと感じていました。

帰つて来たあの十一月二十五日、その身なりは誠に哀れな格好、汚れた詰め襟の服、古びた戦闘帽にリュックサック、シラミを背負つて来た姿、夕方でした。

何はともあれ早速入浴、義兄の衣類をもらつて着替えをし、集まつて来た親せきや友人と、夜遅くまで苦勞話や冒険を冒しての逃避行などを話すのでした。

帰つて来た主人は、明日からの職もなく、義兄に警察官をやつても給与は安くて、生活はできない、しば

らく農業を手伝ってみてはと言われ、二年ぐらい農業とリング作りを手伝い、冬期には北海道札幌方面に職さがし、また闇仕事もやったり、餅菓子を作って病院の下足婆さんに売ってもらったり、いろいろ苦勞しました。

翌年の二十一年五月二十一日、勅令第二八七号で自然退官が発令になり、それまでは札幌の樺太庁残務整理事務所から、給与は支給されておりました。

その内に長男は青森県の職員に、次男は青森市の農業会館に就職、長女を頭に国民学校に四人、着る物も満足なものはありませんでした。生活苦に追われる中に、私は五男を産みました。誠に目出度いというか、悲しいというか、当時の配給米は少々、トウキビの粉、サツマイモ、毎日これらのお粥を作るのが大変でした。衣類も配給が少なく、私たちのような子供の多い者は特に難儀をいたしました。

昭和二十三年十一月、青森市中央町に、土地三十坪ぐらいに木造平家十五坪を新築して移転したときの喜びは、今でも忘れることはできません。そこに移って

からは樺太引揚団体があり、そこと連絡して、種々の仕事をしました。

長女、次女もアルバイトをするようになり、私と主人は三沢市方面の海岸でとれた小鯛を煮干にして、統制品ではなかったので、運んできて売ったりしたものです。

その後、昭和二十四年十二月十日、主人はかねて青森市の職業安定所に履歴書を提出してありましたところ呼び出しがあり、三沢米軍基地の警備員増員三十五人に採用となり、米軍司令官と面接して、合計四百八十人の三沢米軍基地警備隊長として、単身赴任となりました。一月十日には米軍の官舎を支給され、家族全員が入居、米軍要員は給与も良く、やっと人並に生活できる基礎ができて、家族みんな喜び合いました。これも今までまじめに仕事を勤めた実績があったからだと思うことと併せ、神仏の加護のお陰と思っております。

睦子の五十回忌を前に、主人は当時の遭難の様子を調べました。

泰東丸が大泊に入ったのは、八月十七日の夕刻である。波止場周辺は、大勢の引揚者で埋まっていた。米のとれない樺太では非常の場合に備えて、一年分の米を備蓄していた。それを北海道へ運ぶための船が、泰東丸だった。二十日、真岡へのソ連軍の上陸、上敷香、落合、並川地区への空襲と切迫した情報に、デッキからこぼれんばかりの満員の避難民を乗せ、引揚船は次々と大泊港を後にした。小笠原丸、第二新興丸の出港を見送った後、泰東丸が米と引揚者を乗せ、大泊の岸壁を離れたのは、二十日午後十一時ごろだった。

翌朝、甲板の引揚者から異様なざわめきが起こった。リュックや子供の水筒、荷造りをした箱、それに木片などのおびただしい浮遊物が海流に乗って漂っている。船員はどこかの船が浮遊機雷にやられたなど直感し、万一に備え船の進路を陸寄りに取った。泰東丸は何事もなかったように南下していた。目的の小樽はもうすぐだった。左に鬼鹿の海岸線がはつきり見えるようになり、安心したのも束の間、突然ソ連の潜水艦の攻撃を受けた。大きな水柱が続げざまにあがったが、それ

でも引揚者たちは、自分たちの身に何が起きようとしているのか、まだ分かっていなかったようだ。船長の判断でエンジンが止められ、白旗が掲げられた。

ところが潜水艦の砲が、再度火を吹いた。逃げ場のない甲板の上では、女、子供の悲鳴があがり、肉片が飛び散り、血の海となった。船は既に大きく傾いていた。海上では、船体の破片や荷物などと大勢の女、子供たちが浮いている物につかまっている……。泰東丸、小笠原丸、第二新興丸、三船の避難者は、千七百八人と聞く。私たちが泰東丸に乗っていれば、千七百十八人になるところであった。

睦子の靈感か、神仏の加護か、あまりに不思議ではありません。

睦子の五十回忌は、今年の八月二十七日、遺骨の眠る青森の本家で行われました。

改めてあの時の事を語り合い、睦子に感謝するのでした。

【執筆者の横顔】

キミさんは明治三十九年青森市の生まれで現在八十八歳になる。若き日に高等女学校を卒業後、北津軽の素封家須郷家に所望されて四男の須郷与四郎氏に嫁した。

与四郎氏は青森県警察官に任用されたが、昭和四年に樺太庁の警察官に転属となった。

キミさんは主人は公務員、しかも国境の第一線での重責勤務であるところから、家庭の煩わしいことは一切させてはならないとの心構えであった。

零下三〇度以上になる酷寒樺太も、平和な楽しい夫婦和合の須郷家には多くの主婦たちが集まっては交誼を深くして楽しい生活を送っていた。

昭和二十年八月、終戦の詔勅が渙発されたあとである。

ソ連が空、陸、海の三方から樺太に侵攻、砲撃正に雷鳴、雨霰の如く襲撃し、在留日本人を惨殺、暴行、略奪をほしきままにした。

つまり国際条約を破つての不法行為に、キミさんは

強烈な憤りを感じた。

須郷与四郎警察官らは、ソ連軍の残虐行為から日本人を守るため、引揚げ援助に奔走していた。キミさんは女一人の手で我が子九人を引き連れて逃避行を続け、大泊港にたどりつき、引揚船の泰東丸に乗り移った出航直前に、三歳の幼女がパンを食べたいと言って泣き出し、十五歳の長男を下船させ買いに走らせたが、なかなか戻って来ないので万やむなく、次の引揚船に乗ることにした。ところが、出帆したその船はソ連軍の砲撃で沈没したのである。三歳の幼女の霊感か、神佛の加護か。十人無事に青森に引き揚げることができた。

昭和三十年十一月与四郎氏も引き揚げられ、仕事も順調で一家の生計を切り盛りして、平和な家庭に終始一貫して、尽くされたキミさんの内助の功に敬意を表してやまない。

(引揚者団体北海道連合会)

副会長 池田 幸次郎